

入所施設を利用する高齢者の「居場所感」に関する予備的検討

中村 美智代*

A Preliminary Study on "Feeling of Whereabouts" of Elderly People Using Admission Facilities

Michiyo NAKAMURA*

Abstract

The purpose of this research is to prepare a questionnaire to clarify the "sense of whereabouts" of the elderly and to grasp the actual condition of "elderly people using the admission facilities". The method examined the definition and constituent elements of "sense of whereabouts" in the former research on whereabouts and opinions from experts. As a result, a questionnaire on whereabouts of five places (categories) and 25 items with content validity was created. As for grasping the actual condition, we conducted an interview with 18 elderly people in the facility using the questionnaire on whereabouts feeling. As to the actual situation, as a result of analyzing by comparing the total score, category, high and low group of the subjects to be surveyed, the "sense of whereabouts" of the entrance facility users is generally high in the physical place of presence, we find that there is a pattern such as a tendency to be low, an all high score type, an all low score type, and an intermediate type. Furthermore, it becomes clear that there is a difference in each individual. As a result, we confirm that the questionnaire created in this research can be used as a questionnaire to measure "feeling of whereabouts" of elderly people.

要 旨

本研究の目的は、高齢者の「居場所感」を明らかにするための質問紙の作成並びに入所施設を利用する高齢者の「居場所感」の実態を把握することである。方法は、居場所に関する先行研究と専門家に意見を求め、「居場所感」の定義と構成要素を検討した。その結果、5つの構成要素(カテゴリー)と内容的妥当性のある25項目からなる居場所感質問紙が作成された。居場所感質問紙を用いて、施設を利用している高齢者18人に面接法により実施した。その結果、調査対象者の総得点・カテゴリー別・高低群で比較して分析したところ、入所施設利用者の「居場所感」は、概ね物理的居場所感が高く、役割的居場所感が低い傾向にあること、全高得点タイプ、全低得点タイプ、中間タイプなどのパターンがあることがわかった。さらに、個々人については、それぞれ相違があることが明らかになった。これらにより、本研究で作成した質問紙は高齢者の「居場所感」を測る質問紙として使用可能であることが確かめられた。

Key Words : contents validity squirrel, place of presence,

キーワード : 内容的妥当性, すまい方, 居場所感

*本学専任講師

論文(原著) : 2017年12月22日受付 2018年1月26日受理

1. はじめに

我が国の総人口は、平成27(2015)年10月1日現在、1億2,711万人となっている。65歳以上の高齢者人口は、3,392万人で、総人口に占める割合(高齢化率)は26.7%となった超高齢化社会である。在宅生活の継続を促進するサービスは充実しつつあるが、様々な理由から余儀なく入所施設を利用する高齢者も多い。

在宅から施設への住み替えに当たっては、多くの困難や負担を抱えている実態がある。千葉(2012)は、リロケーションダメージについて、高齢者が住みなれた地域での生活を離れ、施設などへ移り住むことが、①心の不安や体調の悪化、②周囲の人との新たな関係を構築することの困難さ、③新たな変化に伴うライフスタイルの再構築でのストレスの蓄積、④閉じこもりや引きこもりといったネガティブな過ごし方になること、を指摘している。

厚生労働省は、「2025年(平成37年)を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるように、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築を推進する」としている。平成25年3月 地域包括ケア研究会報告書によると、「地域包括ケアシステムの5つの構成要素は『介護』『医療』『予防』という専門的なサービスと、その前提としての『住まい』と『生活支援・福祉サービス』が相互に関係し、連携しながら在宅の生活を支えている」としており、その中の「すまいとすまい方」については、「生活の基盤として必要な住まいが整備され、本人の希望と経済力にかなったすまい方が確保されていることが地域包括ケアの前提で、高齢者のプライバシーと尊厳が十分に守られた住環境が必要」と指摘している。

住環境のひとつである入所施設でのすまい方を考えるとき、施設利用する高齢者に対しては「尊厳の保持」が課題となり、人格を尊重することや、ありのままの姿(その人らしさ)を受け入れることが求められる。高齢者が個人の私生活に関する事柄について、訳もなく暴かれない、介入されないプライバシーの保護(幸福追求権)や、個人の人生にとって大切な私的事柄について、干渉されずに自分自身の意思で選択・決定できる自己決定権(信教の自由、表現の自由、幸福追求権)の保障も必要である。さらに、心身の状況や判断能力が低下して自分の意思を表明することや行動が困

難になっても、ストレングスの視点を持ち、エンパワメントの視点から、権利が擁護されることが重要である。

地域包括ケアシステムの資源の1つである入所施設には、地域と結びついた施設であることが求められる。在宅生活がかなわず施設を利用するに至った高齢者は、入所施設に住まいを移し、心身の状況が変化しても、個人の価値観や権利を支援者側が守ることが支援の基盤であり、入所施設の中で自らの「居場所」を獲得し、地域とのつながりをもつ一員として、地域と共生することの実現が必要なのである。そのすまいとしての入所施設でのすまい方には「居場所感」を獲得していることが必要である。現在の社会的背景を照らしても、「居場所感」を得るための方法論を確立していくことが急務といえる。

2. 第1研究 質問項目の作成

1) 文献検討

居場所感質問紙の作成にあたり、信頼性・妥当性が検証されている「居場所」についての先行研究を参考にした(表1)。

2) 居場所感質問紙の構成要素(5つのカテゴリー)の設定

先行研究を踏まえた上で、「物理的居場所」「社会関係の居場所」「役割的居場所」「自由開放的居場所」「主体的居場所」の5つをカテゴリーとして設定した。

(1) 物理的居場所

本研究では、物理的居場所は「物理的な空間であり、身体的な休息とエネルギーを補給してくれる場所」とした。秦(2000)は「物理的な場所とそこにいる個人の安心した心理状態の両方が居場所には必要」と述べ、相田(2002)は、「居場所を感じられる物理的場所があることが必要」とし、木全(1999)は「物理的に身体に休息とエネルギーを補給してくれる場」とも指摘している。

例えば、入所施設を利用する高齢者に必要な睡眠や食事を取ることができる、安全が確保されている、休憩ができる、プライバシーを保つことができるなど、これらが可能である場所である。

(2) 社会関係の居場所

本研究では、社会関係の居場所は「他者とのかわりによって、自分の位置や自らの将来の方向性を確認できる場所」と定義した。相田(2002)は「関係」(人間関係・組織との関係)にかかわるもので、家族や友人との親密な関係や所属集団、すなわち「会社組織など

表1 参考にした研究・尺度

	論文タイトル	筆者	発行年	掲載誌
1	居場所概念の再構成と居場所尺度の作成	原田克巳 滝脇裕哉	2014	金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要(6), 119-134
2	女子大学生における基本的居場所感の検討	浅井美帆	2013	金城学院大学大学院人間生活学研究科論集 13, 29-32
3	「居場所感」尺度の作成	岡本卓也 口田江里	2013	感情心理学研究 21(Supplement), 3737
4	介護老人福祉施設入所による生活環境変化に適応するための要因: 後期高齢者のインタビュー調査より	田原育恵 堀内美由紀 安田千寿 筒井裕子 太田節子	2013	聖泉看護学研究 2, 59-67
5	地域在住認知症高齢者の居場所をつくる心理臨床学的支援: 高齢者間の相互的交流と役割感に着目して	吉川桃子	2013	心理臨床学研究 31(4), 640-650
6	精神に病を持つ人の居場所感尺度の検討	國方弘子 茅原路代 土岐弘美	2009	厚生 の指標 56(13), 40-47
7	特別養護老人ホームで生活する高齢者のエンパワメント支援に関する検討--施設入居前後の社会関連性の変化から	伊藤智子 加藤真紀 梶谷みゆき 常松さゆり 諸井望 金築真志	2007	島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 1, 51-58
8	「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化	杉本希映 庄司一子	2006	教育心理学研究 54(3), 289-299
9	思春期における心理的居場所感尺度作成の試み	則定 百合子	2006	神戸大学発達・臨床心理学研究 5, 29-34

セカンダリーグループへの帰属意識」としている。秦(2000)は「居場所とは他者とのつながりが存在していること」とし、堤(2002)は「自己の存在性が実感できる心理的場、自と他が交錯する場」と示している。住田・南(2003)は「自己を包み込んでくれる他者との関係がある場所」、田中(2001)は「他者とのかわりの中で、自分の位置と将来の方向性を確認できる場」としている。これらのことから具体的には、「施設内の他の利用者や職員とあいさつや談笑、相談や依頼をしたり、家族や親戚、友人、ボランティアなその地域の人と時間を過ごしたりして、かわりにより社会とのつながりを感じ、自分の存在について考える場所」とした。

(3) 役割的居場所

本研究では、役割的居場所は「その社会の中で自らが役立つことができると感じる場所」と定義した。中西(2000)は「周囲から自分の存在が重視されていることを表す『役割感』を指摘し、相田(2002)は『社会の中での』役割にかかわるものとし、『役割的居場所のなさ』には、できるのに役に立てない『虚脱感』、役に立つこと自体ができないという『無力感』があるとしていることから、具体的にはその人が他者から期待される役割を果たすことで自分の存在を実感できる場所」とした。例えば、「自分に任されている担当や係り、利用する高齢者で構成する自治会の役員、非公式な係りである植物などへの水やり、飾り付けや清掃などの行いで自らが役立つ場所」とした。

(4) 自由開放的居場所

本研究では、自由開放的居場所は「自分の楽しみや趣味など個人的なものごとを行うための場所」であり、「個人的なものごとに取り組める時間や場所」である。これらに加えてその人が日常的な事物からも離れる視点を加え、「開放」という用語を用いて定義した。相田(2002)は、「自分のためのやること、楽しみ、かわるものを『自己目的的居場所』」とし、藤竹(2000)は「自分であることを取り戻せる場所」としている。杉本・庄司(2006)「いつも生活している中で特にいたいと感じる場所」で、石本(2010)は、「居場所をありのままにられる、自分らしくいられる場所」としている。原田(2014)は、『「行動の自由、他者からの自由」(杉本・庄司2006)を得ることが、情緒が安定するために重要で、具体例として、自分の好きなことをして気を紛らわしたり楽しんだりすることによって、自己への焦点づけを回避しようとしたり緊張を解消しようとしたりすること」をあげている。例えば、「手芸、読書、音楽鑑賞、絵画、作文、書道、料理等創作活動などの好きなことができる場所」とした。

(5) 主体的居場所

本研究では、主体的居場所を「他者からの指示を受けずに選択し、自主的に行動ができる場所、これまでのことを振り返ったり、現在のことを把握したり、これから先のことを考えたりするなど、自己像の確立を可能にできる場所」と定義した。伊藤ら(2007)は、特

別養護老人ホームの利用者を調査し、施設は「一生涯社会と自分の関わりを見つめ、自分の存在意義を認識することが主体的なその人らしい生活を送り、エンパワメントを助ける生活の場」と入所施設利用者の場を捉えている。原田・瀧脇(2014)は、「自己像を確かなものにしていくことが居場所」であり、「自己にまとまりと凝集性を得られるような体験ができる自己指示的な場(アーネスト・S・ウルフ1998安村・角田訳)としていることから、具体的には主体的なその人らしい生活を送り、自己像が確立できる場所」としているところを参考に定義した。

3) 質問項目の作成とレイアウト

質問項目の配置はキャリーオーバー効果が生じないように配置し、教示文は対象者が日頃の行動を想起しやすいように設定した。質問項目は先行研究より50項目を選定し、選択肢数は奇数の選択肢による中央の中立的な選択を避けるため、偶数の4件法を採用した。表現は「よくあてはまる(4点)」、「あてはまる(3点)」、「ややあてはまる(2点)」、「あてはまらない(1点)」と設定する。総得点の高い状態ほど居場所感を示すことを示している。

4) 質問項目の内容の妥当性の検討

まず、入所施設を利用する高齢者の「居場所感」に関する質問項目の内容的妥当性の検証のため、専門家10人に「物理的居場所」「社会関係的居場所」「役割的居場所」「自由開放的居場所」「主体的居場所」のそれぞれの定義を記した書面を渡し、その内容を説明した。

次に、それぞれの質問項目が記された50枚のカードを、当てはまると思われる5つのカテゴリーのひとつに振り分けて分類してもらい、それぞれ一致率を確認した。

その結果、ばらつきのある項目や不明瞭な内容の質問項目は精査し、質問項目数を50項目から25項目に絞って、再度、専門家10人に一致率の調査を行った。

質問紙に関する質問項目と調査対象者への説明方法や質問項目の表現の適切性についても確認した結果、質問項目は70%以上の一致率が得られた。

3. 第2研究 入所施設高齢者の「居場所感」の実態把握

1) 調査

(1) 調査対象者

入所施設であるケアハウスの在籍者数は27人であったが、対象回答者数は18人で、男性3人、女性15人であった。

(2) 調査期間

平成29年12月初旬に行った。

(3) 分析方法

対象者特性調査およびフェイスシートにより、対象者の基本属性(年齢、入所期間、性別)を調べた。「居場所感」については、質問項目の記述統計値(平均、標準偏差)を算出した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、甲子園短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。施設長に研究を実施したい旨の説明と研究対象者の選定を依頼し、高齢者本人にも研究の趣旨を説明して同意を得た。高齢者本人のデータは記号化し、個人の特定ができないよう配慮した。

2) 結果

(1) 対象の基本属性

対象者は18人で、性別は、男性3人(16.6%)、女性15人(83.3%)であった。平均年齢は86.44歳(SD=7.02)であった。平均要介護認定区分は要支援2(SD=0.9)であり、平均入居期間は5年4か月(SD=2.8)であった(表2)。

(2) 実施方法と対象者の反応

対象者の調査は個別に面接し、質問紙と4つの選択肢を記入した表の2つを提示して、項目を読み上げた後に対象者が選択する方法をとった。いくつかの設問

表2 入居者の属性

	人数	平均年齢 (SD)	平均入居期間	平均要介護認定区分
男性	3	77.5 (10.68)	3年9か月	要支援2
女性	15	81 (5.40)	5年6か月	要介護1
全体	18	86.44 (7.02)	5年4か月	要支援2

に補足説明を求められたが、これらについては具体例を含め説明することで対象者に理解は得られた。

①物理的居場所

全員が居室をイメージしており、居室が個室であるためイメージしやすかった様子だった。「4. トラブルや危険を避けて、安全に生活が送れる場所」については、「トラブルとは例えばどのようなことか」と尋ねられ、対人対物などの事故例などを5人に説明した。

②社会関係の居場所

「10. 地域の人と自由に話し、活動して、交流する機会や時間がある場所」については、内容に具体性を持たせるために、地域の人とは施設外の人を指し、活動は散歩や買い物、趣味活動や老人会、デイサービスやデイケアの利用も含まれることを付け加えて説明した。

③役割的居場所

設問の内容はわかりやすい様子で内容について特に説明は求められなかった。「頼りにされることなんかない」と笑いながら話される人が5人、「そんなのはない」と強い言葉で返される人も2人いた。役割の認識の有無は個人でははっきりしており、全員が回答するまでに時間を要しなかった。

④自由開放的居場所

「18. 同じ楽しみを持つ人と一緒に楽しめる場所」については、内容に具体性を持たせるために施設内のレクリエーションの参加やデイサービスの利用、趣味活動などの場面で、他者と一緒に楽しめる場所、と説明した。

⑤主体的居場所

「22. 生活スタイルを自分なりに工夫できる場所」の「『生活スタイル』はどのようなことか」尋ねられ、生活の手順や方法、習慣、生き方などと付け加えた。また、「24. 自分の体調に合わせた活動を自分で行うことができる場所」については、「活動」の具体を尋ねられ、「個々人の日常的な活動を指す」と説明した。

(3) 質問紙全体についての回答結果

質問項目は、全体の総得点が100点満点で、カテゴリはすべて20点満点にしてある。回答の結果は最高得点が99点、最低得点が60点であった。平均点は85.4点で、標準偏差は10.8であった。全体の項目別得点の平均は3.4で、標準偏差の平均は0.7であった(表3) 参照。

①物理的居場所

項目別得点の平均は3.9~3.5点、標準偏差は0.7~0.2で、カテゴリ別得点平均が3.8点、標準偏差は0.5であった。

②社会関係の居場所

項目別得点の平均は3.8~3.1点、標準偏差は1.1~0.4で、カテゴリ別得点平均が3.4点、標準偏差は0.9であった。

③役割的居場所

項目別得点の平均は3.0~2.5点、標準偏差は1.2~1.0で、カテゴリ別得点平均が2.8点、標準偏差は1.1であった。

④自由開放的居場所

項目別得点の平均は3.8~3.3点、標準偏差は0.9~0.4で、カテゴリ別得点平均が3.6点、標準偏差は0.7であった。

⑤主体的居場所

項目別得点の平均は3.9~3.0点、標準偏差は1.0~0.3で、カテゴリ別得点平均が3.5点、標準偏差は0.9であった。

(4) 各項目の回答結果

カテゴリ別項目得点は、以下の通りの結果となった。

①物理的居場所

カテゴリ別得点の平均点は3.8で高得点であったが、「2. 他の人の目を気にしないでいられる場所」や「4. トラブルや危険を避けて安全に生活が送れる場所」の項目が低かった。「集団生活だから人の目はいつもあり、最初は落ち着かないもの」や、「集団生活ではトラブルは回避できないこともある」と5人の人が回答した。

②社会関係の居場所

「6. 他の人と話をする機会や時間がある場所」や「7. 施設内の人とつきあいをよくする機会や時間がある場所」の項目は、食事や施設内のレクリエーションの時間をイメージされており、「個人的にお付き合いをすることは、(トラブルなど) いろいろあったらあとが面倒になるから控えている」と11人の人が回答していた。「10. 地域の人と自由に話し、活動して交流する機会や時間がある場所」の項目が低く、毎日散歩や買い物に出かける人も6人いたが、「外出はほとんどしない」「(付き合いはしんどいから) デイサービスもいかない」といった回答も5人いた。

③役割的居場所

全体的にどの項目も低かったが、特に「11. 他の人から頼まれたり、決められた役目がある」という設問には「自分が家族に頼むばかりで、人からの頼まれごとはないし、施設からも頼まれることもない」といった回答を9人から聞いた。「もう自分ひとりではできな

表3 項目別得点、対象者別得点、カテゴリー別得点、総得点一覧

n=18

NO	質問項目	項目別得点																		カテゴリー別得点					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	合計	平均	標準偏差	合計	平均	標準偏差
物理的居場所	1 自分がホッとして、気持ち落ち着く場所	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	71	3.9	0.2	340	3.8	0.5
	2 他の人の目を気にしないでいられる場所	4	2	4	4	3	4	4	4	3	4	3	3	2	4	4	4	4	3	63	3.5	0.7			
	3 ゆっくりと寝ることができる場所	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	70	3.9	0.3			
	4 トラブルや危険を避けて、安全に生活が送れる場所	4	4	4	3	4	4	2	3	4	4	4	4	4	3	3	4	3	4	65	3.6	0.6			
	5 個人的な日常生活や行動を興味本位で見られたり、干渉されずに安心して過ごすことができる場所	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	71	3.9	0.2			
社会的関係的居場所	6 他の人と話をする機会や時間がある場所	4	4	3	4	3	2	1	4	2	4	4	1	4	4	4	4	4	4	60	3.3	1.1	308	3.4	0.9
	7 施設内の人につきあいをよくする機会や時間がある場所	4	3	4	4	4	3	1	4	3	4	4	1	2	3	3	4	4	3	58	3.2	1.0			
	8 困ったことがあれば話を聞いてくれたり、相談ができた場所	4	4	4	3	4	4	3	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	69	3.8	0.4			
	9 自分のことをわかってくれる人がいる場所	4	4	4	4	4	2	3	3	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	66	3.7	0.6			
	10 地域の人と自由に話し、活動して、交流する機会や時間がある場所	4	3	3	3	1	1	1	4	2	3	3	4	4	3	4	4	4	4	55	3.1	1.1			
役割的居場所	11 他の人から頼まれたり決められた役目がある場所	3	1	4	4	1	1	1	3	2	4	1	3	2	3	3	4	2	3	45	2.5	1.1	256	2.8	1.1
	12 自分が場面に応じて、みんなのために役立てると思える場所	3	3	4	4	3	1	1	4	3	4	1	3	4	3	3	4	3	2	53	2.9	1.0			
	13 自分が他の人から頼りにされていると感じる場所	3	1	4	3	2	2	1	4	2	3	2	4	4	3	4	3	3	3	51	2.8	1.0			
	14 自分の働きが、誰かや皆を支えていると思える場所	4	1	4	4	3	1	1	4	1	4	2	4	4	4	3	4	2	3	53	2.9	1.2			
	15 自分に任されたことを行うことで、自信が持てる場所	3	4	4	3	2	1	1	4	1	4	2	4	4	3	3	4	3	4	54	3.0	1.1			
自由開放的居場所	16 集団のルールに縛られず、自分の好きなことができる場所	4	3	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	69	3.8	0.4	320	3.6	0.7
	17 自分の活動に、夢中になれる場所	4	4	2	4	2	2	3	4	4	4	4	3	4	2	2	4	3	4	59	3.3	0.9			
	18 同じ楽しみを持つ人と一緒に楽しめる場所	4	4	4	3	2	2	1	4	4	3	3	3	4	4	2	4	4	4	59	3.3	0.9			
	19 自分らしくありのままにいられる場所	4	4	4	4	3	4	4	4	3	4	4	4	4	4	2	4	4	4	68	3.8	0.5			
	20 趣味などの個人的なことを楽しめる場所	4	4	3	4	2	2	3	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	65	3.6	0.7			
主体的居場所	21 過去の出来事やその日のことを、一人で振り返ることができる場所	4	3	2	4	2	2	1	2	4	3	2	3	4	4	4	4	4	4	56	3.1	1.0	313	3.5	0.9
	22 生活スタイルを自分なりに工夫できる場所	4	3	4	4	4	2	4	3	4	4	3	3	4	4	4	4	4	4	66	3.7	0.6			
	23 自分自身の今後のことを一人であれこれ考えることができる場所	4	3	2	4	4	2	1	2	4	3	2	2	4	4	2	3	4	4	54	3.0	1.0			
	24 自分の体調に合わせた活動を自分で行うことができる場所	4	4	4	4	4	1	4	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	67	3.7	0.8			
	25 日々の目標や過ごし方を自分で決められる場所	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	70	3.9	0.3			
	合計	96	80	91	94	77	62	60	92	78	95	81	81	93	91	84	99	90	93	1537	85.4	18.6			
	平均	3.8	3.2	3.6	3.8	3.1	2.5	2.4	3.7	3.1	3.8	3.2	3.2	3.7	3.6	3.4	4.0	3.6	3.7	61.5	3.4	0.7			
	SD	0.4	1.0	0.7	0.4	1.0	1.2	1.3	0.6	1.0	0.4	1.0	0.9	0.7	0.6	0.7	0.2	0.6	0.5	10.8	0.4	0.3			

表4 総得点 高群・低群

n=14

NO	質問項目	高群										低群									
		16	1	10	4	13	18	8	3	14	合計	平均	標準偏差	2	9	5	6	7	合計	平均	標準偏差
物理的居場所	1 自分がホッとして、気持ち落ち着く場所	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36	4.00	0.00	4	4	4	3	4	19	3.80	0.40
	2 他の人の目を気にしないでいられる場所	4	4	4	4	2	3	4	4	4	33	3.67	0.67	2	3	3	4	4	16	3.20	0.75
	3 ゆっくりと寝ることができる場所	4	4	4	4	4	4	4	4	3	35	3.89	0.31	4	4	4	4	3	19	3.80	0.40
	4 トラブルや危険を避けて、安全に生活が送れる場所	4	4	4	3	4	4	3	4	3	33	3.67	0.47	4	4	4	4	2	18	3.60	0.80
	5 個人的な日常生活や行動を興味本位で見られたり、干渉されずに安心して過ごすことができる場所	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36	4.00	0.00	3	4	4	4	4	19	3.80	0.40
社会的関係的居場所	6 他の人と話をする機会や時間がある場所	4	4	4	4	4	4	4	3	4	35	3.89	0.31	4	2	3	2	1	12	2.40	1.02
	7 施設内の人につきあいをよくする機会や時間がある場所	4	4	4	4	2	3	4	4	3	32	3.56	0.68	3	3	4	3	1	14	2.80	0.98
	8 困ったことがあれば話を聞いてくれたり、相談ができた場所	4	4	4	3	3	4	4	4	4	34	3.78	0.42	4	4	4	4	3	19	3.80	0.40
	9 自分のことをわかってくれる人がいる場所	4	4	4	4	4	4	3	4	4	35	3.89	0.31	4	3	4	4	3	16	3.20	0.75
	10 地域の人と自由に話し、活動して、交流する機会や時間がある場所	4	4	3	3	4	4	4	3	3	32	3.56	0.50	3	2	1	1	1	8	1.60	0.80
役割的居場所	11 他の人から頼まれたり決められた役目がある場所	4	3	4	4	2	3	3	4	3	30	3.33	0.67	1	2	1	1	1	6	1.20	0.40
	12 自分が場面に応じて、みんなのために役立てると思える場所	4	3	4	4	4	2	4	4	3	32	3.56	0.68	3	3	3	1	1	11	2.20	0.98
	13 自分が他の人から頼りにされていると感じる場所	4	3	3	3	4	3	4	4	4	32	3.56	0.50	1	2	2	2	1	8	1.60	0.49
	14 自分の働きが、誰かや皆を支えていると思える場所	4	4	4	4	4	3	4	4	4	35	3.89	0.31	1	1	3	1	1	7	1.40	0.80
	15 自分に任されたことを行うことで、自信が持てる場所	4	3	4	3	4	4	4	4	3	33	3.67	0.47	4	1	2	1	1	9	1.80	1.17
自由開放的居場所	16 集団のルールに縛られず、自分の好きなことができる場所	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36	4.00	0.00	3	3	4	4	4	18	3.60	0.49
	17 自分の活動に、夢中になれる場所	4	4	4	4	4	4	4	2	2	32	3.56	0.83	4	4	2	2	3	15	3.00	0.89
	18 同じ楽しみを持つ人と一緒に楽しめる場所	4	4	3	3	4	4	4	4	4	34	3.78	0.42	4	4	2	2	1	13	2.60	1.20
	19 自分らしくありのままにいられる場所	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36	4.00	0.00	4	2	3	4	4	17	3.40	0.80
	20 趣味などの個人的なことを楽しめる場所	4	4	4	4	4	4	4	3	4	35	3.89	0.31	4	4	2	2	3	15	3.00	0.89
主体的居場所	21 過去の出来事やその日のことを、一人で振り返ることができる場所	4	4	3	4	4	4	2	2	4	31	3.44	0.83	3	4	2	2	1	12	2.40	1.02
	22 生活スタイルを自分なりに工夫できる場所	4	4	4	4	4	4	3	4	4	35	3.89	0.31	3	4	4	2	4	17	3.40	0.80
	23 自分自身の今後のことを一人であれこれ考えることができる場所	3	4	3	4	4	4	2	2	4	30	3.33	0.82	3	4	4	2	1	14	2.80	1.17
	24 自分の体調に合わせた活動を自分で行うことができる場所	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36	4.00	0.00	4	2	4	1	4	15	3.00	1.26
	25 日々の目標や過ごし方を自分で決められる場所	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36	4.00	0.00	3	4	4	4	4	19	3.80	0.40
	合計	99	96	95	94	93	93	92	91	91	844	93.78	2.44	80	77	77	62	60	356	71.2	19.5
	平均	4.0	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	33.8	3.8	0.4	3.2	3.1	3.1	2.5	2.4	14.2	2.8	0.8
	SD	0.2	0.4	0.4	0.4	0.7	0.5	0.6	0.7	0.6	2.4	0.2	0.3	1.0	1.0	1.0	1.2	1.3	8.4	0.8	0.3

(全高得点タイプ)

(中間タイプ)

(全低得点タイプ)

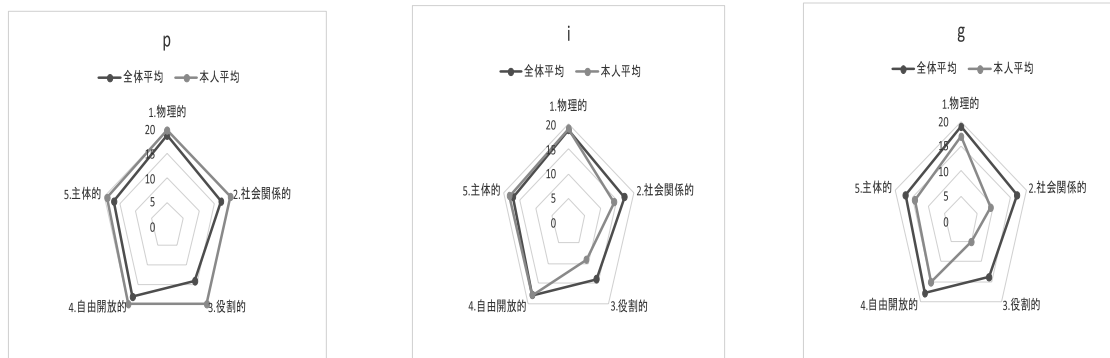


図1 全高得点タイプ・中間タイプ・全低得点タイプ対比

いから」といった内容を4人が回答した。

④自由開放的居場所

「16. 集団のルールに縛られず、自分の好きなことができる場所」の項目が、項目別平均点が3.8で高く、「17. 自分の活動に、夢中になれる場所」「18. 同じ楽しみを持つ人と一緒に楽しめる場所」の項目が、どちらも項目別平均点3.3点で低かった。

⑤主体的居場所

「25. 日々の日課や過ごし方を自分で決められる場所」の項目が高いが、「23. 自分自身の今後のことを一人であれこれ考えることができる場所」の 카테고리別得点の平均が3.6点で低かった。

(5) 高低群の比較

全体の平均値±0.5標準偏差を基準に3群に分類すると、総得点の高い9人(以下、高群)、中間群4人(以下中間タイプとする)、総得点の低い5人(以下、低群)に分けられた(表4参照)。

高群は最高得点が99点、最低得点が91点であった。平均点は93.78点で、標準偏差は2.44であった。低群は最高得点が80点、最低得点が60点であった。平均点は71.2点で、標準偏差は19.5点であった。

6) 事例の比較結果

高群の4人、低群の4人の調査結果を対象にして5つのカテゴリーを軸としたそれぞれのレーダーチャートを作成し、カテゴリーの平均値と事例のパターンを分析した。

全高得点タイプは、本人のカテゴリー得点のすべてが平均値を上回るタイプである。全低得点タイプは本人のカテゴリー得点のすべてが平均値を下回るタイプである。中間タイプは、本人のカテゴリー得点が高い

ものと低いものが混在するタイプ、の3つのタイプに分けられた(図1参照)。

4. 考 察

入所施設を利用する高齢者の「居場所感」の予備的調査としての居場所感質問紙を作成し、これを専門家の調査、意見を反映して、適切に修正して再度実施し、その修正した質問項目を用いて、ケアハウスを利用している高齢者に調査を実施した。

実態把握調査では、総得点・カテゴリー別得点・高低群で比較して分析したところ、少数データではあるものの、入所施設利用者の「居場所感」は、概ね物理的居場所感が高く、役割的居場所感の低い傾向にあることがわかった。自由開放的居場所のカテゴリーでは、施設生活の中で自由度を感じながらも、嗜好にあった、継続した活動ができていないことがうかがわれた。主体的居場所のカテゴリーでは、日々の暮らしは自らが決めていると認識しているが、「これから先のことまでわからない」、「考えが及ばないから」といった傾向がみられた。

次に、カテゴリーの平均値と事例のパターンを分析したところ、全高得点タイプ、全低得点タイプ、中間タイプなどのパターンがあり、全高得点タイプは、自らの趣味や活動などを楽しんでいる人が多く、自らの活動を肯定的に受け止めていることがわかった。

また、全低得点タイプは居室内で過ごされている人が多く、そのため他者とのかかわりや活動、役割などが広がらないもの、自らは主体的に生活を過ごしている認識があることがわかった。今回の質問紙は「居場所感」を測る質問項目として活用が可能であるといえるが、今回作成した居場所感質問紙は試案の段階で

あり、今後のさらなる検討が必要である。

今後の課題としては、「居場所感」がどういった要因と関係しているかを検討する必要がある。要因の中には、年齢や性別、入所施設利用期間、要介護認定区分の状態などが挙げられる。調査対象者については、本研究は入所施設利用者から回答を得たが、在宅の高齢者や通所施設の利用者などの生活形態の要因も考慮し、これらの調査が必要である。さらに、また、構成概念妥当性の検討のために多数の調査データによる因子分析などの統計的検討が求められる。

参考・引用文献

- 相田めぐみ (2004) 「高齢者の「居場所感」－居場所感尺度の妥当性の検討－」『日本社会心理学大会発表論文集』45, 214-215.
- 浅井美帆 (2013) 「女子大学生における基本的居場所感の検討」『金城学院大学大学院人間生活学研究科論集』13, 29-32.
- 千葉和夫 (2012) 「リロケーションダメージからの回復過程とレクリエーション活動支援との接続に関する考察－被災された高齢者の方々の心の復興を願いながら…」『日本社会事業大学研究紀要』58, 95-107.
- Emest S.Wolf,M.D. (1988) .TREATING THE SELF;Elements of Clinical Self Psychology. The Guilford Press,NewYork (アーネスト・S・ウルフ. 安村直己・角田豊 (訳) (2001). 『自己心理学入門 コ福特理論の実践』金剛出版.
- 藤竹暁 (2000) 『居場所を考える (現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ3－現代人の居場所－)』至文堂. pp. 47-57.
- 秦 彩子 (2000) 「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究 (関西学院大学紀要) 26 (1) 97-106.
- 原田克巳・滝脇裕哉 (2015) 「居場所概念の再構成と居場所尺度の作成」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』6, 119-134.
- 伊藤智子・加藤真紀・梶谷みゆき・ほか (2007) 「特別養護老人ホームで生活する高齢のエンパワメント支援に関する検討-施設入居前後の社会関連性の変化から」『島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要』1, 51-58.
- 伊藤智子・加藤真紀・梶谷みゆき・常松さゆり・諸井望・金築真志 (2008) 「特別養護老人ホームで生活する高齢者のエンパワメント支援に関する検討 (第2報) ケアスタッフの意識・行動分析」『島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要』2, 23-34.
- 石本雄真 (2010) 「青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響」『発達心理学研究』21 (3), 278-286.
- 茅原路代・國方弘子・岡本亜紀・ほか (2009) 「デイケアに通所する統合失調症患者の居場所感と Quality of Lifeとの関連」『日本看護研究学会雑誌』32 (1), 1-91-97.
- 木全力夫 (1999) 「家庭・地域に於ける「子供の居場所」の教育的意義」『創大教育研究』8, 39-51.
- 厚生労働省 (2013) 「平成25年3月 地域包括ケア研究会報告書」
- 國方弘子・茅原路代 (2009) 「統合失調症者の居場所感尺度の検討」『看護研究集』16, 73-82.
- 國方弘子・茅原路代・土岐弘美 (2009) 「精神に病を持つ人の居場所感尺度の検討」『厚生指標』56 (13), 40-47.
- 永田千鶴・北村育子・松本佳代・ほか (2014) 「エイジング・イン・プレイスを果たす認知症高齢者ケアモデルの開発：小規模多機能事業所併設グループホームにおけるケアサービスの探究」『熊本大学医学部保健学科紀要』10, 15-26.
- 中西友美 (2000) 「若い世代の母親の居場所感についての基礎的研究」『臨床教育心理学研究 (関西学院大学)』26- (1) 87-96.
- 則定百合子 (2006) 「思春期における心理的居場所感尺度作成の試み」『神戸大学発達・臨床心理学研究』5, 29-34.
- 岡本卓也・口田江里 (2013) 「「居場所感」尺度の作成」『感情心理学研究』21, No. Supplement, 37-37.
- 奥山真由美・岡田ゆみ・渡辺文子 (2004) 「痴呆性高齢者のグループホームケアの効果に関する研究-利用者の生活上のニーズに焦点をあてて-」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』11, 37-46.
- 清水裕子 (2005) 「測定における妥当性の理解のために－言語テストの基本概念として－」『立命館大学立命館言語文化研究紀要』16 (4), 241-254.
- 杉本希映・庄司一子 (2006) 「『居場所』の心理的機能の構造とその発達的变化」『教育心理学研究』54 (3), 289-299.
- 住田正樹・南博文 (2003) 『子供たちの「居場所」と対

人的世界の現在』九州大学出版会. pp. 3-17.

田原育恵・堀内美由紀・安田千寿・ほか (2013) 「介護老人福祉施設入所による生活環境変化に適応するための要因：後期高齢者のインタビュー調査より」『聖泉看護学研究』2, 59-67.

田中治彦 (2001) 『子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わり」へ』学陽書房. pp. 3-12.

外山美樹 (2013) 「楽観・悲観性尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討」『筑波大学心理学研究』83 (3), 256-266.

堤雅雄 (2002) 「「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱」『島根大学教育学部紀要』人文・社会科学36, 1-7.

吉川桃子 (2013) 「地域在住認知症高齢者の居場所をつくる心理臨床学的支援：高齢者間の相互的交流と役割感に着目して」『心理臨床学研究』31 (4), 640-650.